

第16章 国民科国語から戦後教育へ継承されたもの

ー東京第三師範学校附属国民学校のカリキュラム作成ー

第1節 カリキュラム作成の方向性

第1項 カリキュラム改編の契機

東京第三師範附属国民学校（以下「第三師範附属」）は1938(昭和13)年1月に東京府大泉師範学校⁽¹⁾の附属小学校として開校した⁽²⁾。当時、東京府には、青山師範学校附属小学校、豊島師範附属小学校、女子師範学校附属小学校があり、この三師範附属とは違った特色を出すため、自然の中で元気な子供を育成すること⁽³⁾を教育目標とした。第三師範附属の特徴については学校史には「本校は創立以来、教科研究の学校としてではなく、カリキュラム研究の学校として存在感を示してきた。学校教育を横断的に捉え、子どもにとっての学校のあり方を探究して来たとも言えよう。」⁽⁴⁾と記されている。東京の他の師範附属とは別の特色を出すために、農業生産と自然との関わりを多くし、生活指導を充実させる方針であった。

戦後では生活に根ざしたコア・カリキュラムを『小学校カリキュラムの構成』⁽⁵⁾、『生活カリキュラム構成の方法』⁽⁶⁾などで発表し、戦後ではいち早く『討議法』⁽⁷⁾、『新しい学校』⁽⁸⁾などを公刊し、戦後教育の方向性を示した。

この第三師範附属が国民学校についてカリキュラム研究を開始したのは1939(昭和14)年からである。発表になったばかりの国民学校案を、生活指導や行事中心に研究し、その実践報告を『国民学校教育の実践体制』⁽⁹⁾にまとめた。同書は国民学校制度に照らし合わせて、国定第四期の教科書をどのように体系化するかをまとめたものである。国民学校が開始して2年後の1943(昭和18)年10月に「教育ニ関スル戦時非常措置方策」⁽¹⁰⁾が閣議決定されると、それに続いて文部省は1944(昭和19)年1月に「教育ニ関スル戦時非常措置方策ニ基ク国民学校教育内容ノ刷新要綱」⁽¹¹⁾を通達し、勤労の強化、教科の精神訓練・国防訓練の強化、生産増強などを柱にして徹底するよう各学校に求めた。この「戦時非常措置」を契機に第三師範附属は主事の寺門照彦⁽¹²⁾が中心となりカリキュラム作成に着手した。新しいカリキュラムは寺門照彦主事に引き続いて主事になった大塚三七雄⁽¹³⁾が指導に当たり、新カリキュラムは1944(昭和19)年4月より研究と並行して実践され、7月の段階でまとめて『国民学校 戦力教育』⁽¹⁴⁾（以下『戦力教育』）として公刊した。その内容は、1944(昭和19)年4月に文部省通達された「教育ニ関スル戦時非常措置方策ニ基ク国民学校教育内容ノ刷新要綱」⁽¹⁵⁾の内容に沿ったものである。この要綱は「勤労の強化」、「精神訓練」、「国防訓練」、「生産増強」の四点を徹底強化指導し、各教科においても一層の皇国化を徹底するよう求めていたので、第三師範附属ではこの要綱を積極的に受け入れた。そして、国民学校といえども「当面の戦争遂行の増強に直接に参加すべき」であると考え、「国民学校が同胞一億の必勝陣営に参加したことになる」ので、このカリキュラムを「戦力教育」と名付けた。第三師範附属は時局に沿って、軍国主義教育を一層進めようとしたのであった。

第三師範附属では文部省の「教育ニ関スル戦時非常措置方策ニ基ク国民学校教育内容ノ刷新要綱」の指示通り国防訓練の時間や生産増強などの時間を増やし、教科の内容も精神訓練、国防訓練、生産増強

に関わるように検討を開始した。しかし、教科外活動の国防訓練や生産増強の時間を増やすと教科の時間が削減されていく。そこで、この問題を解決するために、要綱にある「各教科ノ重点的徹底ヲ期シ戦力増強ノ根基ニ培フモノトス⁽¹⁶⁾」の文言に注目する。これは国防訓練や生産増強による教科目の時間減に対し、教育内容の能率化のため特定の教科目の内容を重点的に指導し、教科の内容をすべて扱わなくてもよいことを認めたものであった。第三師範附属ではこの文言から、次のように判断する。

戦力教育に於いては教科内の特定科目に重点を置いて指導することが許される（引用者注：略）
特定科目の錬成の飛躍的徹底を期するやう、工夫と努力が傾注せらるべきであらう。（17）

文部省からの通達には具体的にどの科目が「特定科目」になるのか、またどこに「重点」を置くかなどについて一切触れていない。そこで第三師範附属では独自に各科目の重点配置を検討し始めた。特定の科目の時間数を増やすことは、他の科目の時間数を減ずることになる。全教科の時間数を削減するのであれば、それぞれの教科で処理すれば終わることで、大々的なカリキュラム作成を行う必要はない。しかし、第三師範附属は時間数削減のみならず、教材配置や指導内容についても検討をしている。以下、その検討事項を調査する。

第2項 行学一体による総合的な取り扱い

第三師範附属は削減された各教科について、「比較的短い時間に於いても、その行学一体的取扱ひにより、錬成効果が従来に比して遜色なきのみか、一層実質的な向上を期するやう指導させるべき⁽¹⁸⁾」と、「行学一体的取扱ひ」により、効果的に指導が出来ると考えた。行学一体⁽¹⁹⁾とは「行」である行動と、「学」である知的行為とを一つにして扱うということである⁽²⁰⁾。それは知識と行動とを一つにするのではなく、「心身一体、知行合一の域をこえて、一層発展し、その行は戦力性特に生産性によつて担はれてゐる所に特徴がある」⁽²¹⁾と農耕生産や工業生産などの生活に密着して生産性を向上していく点で、知行合一とは異なると述べている。これは、国民学校の先進性を述べるために、それまでにあった知行合一ではなく、別の用語を必要としたものであると考えられる。この行学一体が各教科の学習にどのような効果を与えるかについては、次のように述べている。

行学一体の教育は教材を総合的に扱ひ得る点に於いて、甚しく有利である。否、教育は本質的に行学一体であり、総合的に取り扱はるべきものなのであらう。国民学校制が科目分立主義を排して統合的教科、科目体制をとつたことが、既に画期的な教育道を示したものであつた。⁽²²⁾

国民学校では国民科や理数科など教科を統合していくつかの新しい教科を誕生させ、教科内の科目はお互い連携し、同時期に同じ素材を扱うなど、「総合教授」を取り入れている。これは低学年においては他教科と重複する内容を統合していくことで効率的に学習できると判断したからである。その背景には木下竹次が奈良女子高等師範学校附属小学校で展開した合科学習があつたが、それを認めることは個人主義である大正自由教育を肯定し、国民学校は大正自由教育の模倣になってしまう。それゆえ、合科

教育ではなく、「総合教授」と名付けている。国民学校の総合教授は、総合の科目を作り、教科構造をなくすのではなく、各教科は存続しながら共通する内容をまとめる、いわば「合科」として扱うことであった。第三師範附属では総合教授の具体例を次のように示している。

例 初二のヨイコドモ下の場合、「カミノ舟」「ヤナギニ蛙」に於いて、工夫創造の実践に導きつつ、よみかた「らくかさん」「川」「金魚」に於いて正男の修得した研究態度と連関総合的に指導するならば、授業時間は余程短縮し得るであらう。(23)

この例では、修身の『ヨイコドモ』と国語の『よみかた』とでは登場人物の態度や行動が同一であるので、それを関連すれば、片方の指導は簡略にできると述べている。題材が同じであるから統合するのではなく、登場人物の態度や行動で統合することを統合の基準にしている。この統合の基準を第三師範附属では、次の5点にまとめている。

(1) 生活、行事、季節等との一体化をはかる

生活、行事、季節を互いに照応融合するが如く取り扱ふと共に、行事等は特にその簡素強力化を期し、時間の余裕を見出すのである。(引用者注：略)(24)

(2) 教材相互の一般的関連を重視す

教材相互の連絡統一をはかり、これを有機的に再編成して指導することはしたが、これがため相当の時間の短縮が結果している。その配慮のためには、教師が常に教科内容の全体を考慮して居らねばならぬ。(引用者注：略)(25)

(3) 教材の組織を適宜変更す

例 初五、理科「カヒコ」は、かひこの掃立、飼育、上簇、糸とり等を「蚕の日記」として継続的に記録せしめて、国民科国語、綴方の表現と関連せしめてある。

(4) 教材と生活の一体化をはかる

(引用者注：略)(26)

(5) 家庭作業を教育的に考慮す

学校と家庭との一元化をはかり、家庭に於ける作業を教科生活指導の一環として企画した。所謂従来の宿題の観念とは異なる。(引用者注：略)(27)

(1) については、当時は毎週のように行事が設定されていたので、各教科目内容を行事と関連することにより、その行事の時に指導しようとしたのであり、科目の内容を廃止せずに統合するものである。(2) は科目ごとの内容について重複するものを統合するものである。(3) は教科内容の共通項目についてまとめて指導することで統合するのであり、国民科国語の場合は言語活動の点で統合している。(4) は座学から離れて生活に密接した学習をし、生活と一体化することで、「合科」をより効率的に運用するものである。(5) は宿題と異なると説明しているが、実施的な宿題である。授業時間不足を宿題に回している例である。

これらの中で注目すべき点は、(1)と(4)に見られる教材と生活との関係を重視したものである。学校教育と家庭教育を一体化することは、第三師範附属の教育理念であった。それが顕著に示されている。第三師範附属は「行学一体」のキーワードにより、実生活に結びつく内容のために教科目の内容や配列、指導内容も変えようとしたのである。それゆえ、単に教科の時間数削減の問題に留まることなく、全教科目の内容や配列などをそれぞれの教科目の内容と照合しつつ、より総合的な授業を検討した。それは児童の実生活を考え、行事や他教科との連携を持ち、全体的な学習の向上を意図したのであった。

第2節 カリキュラム作成過程

第1項 年間の総時数計算

カリキュラム改編にあたっては、まず各教科目、行事の内容を整理統合し、時間数の削減をすることから検討を開始した⁽²⁸⁾。その削減は「行事の徹底的簡素化をはかり、実施行事の所要時間を検討し、一年間の行事所要時数二五九時間と定めた。⁽²⁹⁾」と全体の行事数を減らすことなく、行事の内容を厳選していくことで、行事は従来通り遂行し、なおかつ授業の内容を削らないような工夫がみられた。

次に、教科目の時間数を教材と行事の関係から算出し、全体で削減できる時数を算出した。第三師範附属では一年間の行事に必要な時数は259時間と定め、行事を日数ではなく教科目と同じ(40分単位の)時間数で算出しているのも、「行学一体」の影響である。各教科目の年間時数は表16-1の通り算出した。

表16-1 学年別授業時数⁽³⁰⁾

		初一	初二	初三	初四	初五	初六	高男	高女
国民科	修身	193	295	33	29	男45 女47	36 37	50	50
	国語			221	188	165	166	116	116
	国史			郷土	35	61	63	54	54
	地理			(30)	(30)	52 (30)	54 (30)	55 (30)	55 (30)
理数科	算数	183	216	150	167	157	168	102	102
	理科			106	115	135.5	134	80	80
体錬科	体操	115	125	176	180	男131 女142	113 144	160	122
	武道					男66 女33	66 33		
芸能科	音楽	147	175	53	53	51	53	34	34

	習字			34	35	31	28	34	34
	図画			38	男67 女34	56 38	56 30	102	102
	工作			41	男78 女45	75 43	85 47		
	裁縫				74	65	65	職 (31)	136 (31)
	家庭							180	82
実業科	農業							180	82
計		638	811	884	男974 女985	1055.5 1050.5	1054 1054	1098	1062
教科書編纂ニ予定セラレタル総時数トノ比較		減 270	187	186	男252 女241	253.5 258.5	244 244	220	251

これらの時間数は、週単位ではなく年単位の時間数で計算されている。文部省が「国民学校令施行規則」で示したのは週当たりの時間数である。この年間の時間数で各教科目を配当することは週単位の時間数を配当するのと大きく違ってくる。それは、各週の時間割によって年間の授業時数が決まるという発想ではなく、年間の時間数を確保して、それをどの月のどの日に配分するかという発想であり、全体を見てから部分の教材や行事との関係を見て配当している⁽³¹⁾。年間の授業時間を算出して示す方法は、戦後教育につながる方法である。

第2項 全体を見渡した教育実践計画表

第三師範附属では各教科目と行事の内容を検討し、年間の時間数を決定した後、各教科目の授業内容、教材を配置した授業計画表「戦力教育実践計画表」を作成した。年間計画表作成の後は、各教科目や行事の内容と時間数を配当した月間の計画表を作成した⁽³²⁾。月間の計画表には月単位の時間割も入れてあり、この時間割が第三師範附属が独自に考案したものである。年間の時間数を決定すると、週で割り切れない場合がある。それで、月ごとに作成したのである。時間割を週単位ではなく、月単位で作成したのは、天候や教材内容によって時間割を流動的に変えることが出来るからである。月間の計画表に掲載されている二年生の五月の時間割が表16-2である。これを見ても、週単位でなく、月単位で時間割が作成されているのがわかる。

表16-2 初等科二年五月の時間割(33)

日	曜	1	2	3	4	5
1	月	修	読	体	算	理
2	火	読	音	体	体	生産
3	水	算	体	読	読算	綴
4	木	体	端午会予行演習			下校
5	金	端午会			読	算
6	土	綴	読	興	体	
8	月	端午体錬大会				清掃
9	火	読	音	習	図	図
10	水	図	理	工	工	工
11	木	算	読	綴	体	体
12	金	音	海軍葬	健民検査		体
13	土	綴	読	父母会準備		父母会
15	月	算	生産			
16	火	修	音	読	算	
17	水	算	読	図	図	体
18	木	白子川方面へ 五月ノ島				
19	金	音	算	体	読	防訓
20	土	読	体	興		
22	月	警戒警報発令中児童登校セズ				
23	火	○	音	読	算	生産
24	水	算	体	図	図	生産
25	木	楠木公行事				
26	金	春季徒歩検定会				
27	土	興	算教	青葉綴鑑賞		
29	月	習	読	手旗	体	生産

30	火	算	音	読	体	生産
31	水	整理	工	工	手旗	整理

この時間割は計画案ではなく、1944(昭和19)年に実施したものであり、計画段階に修正が入っていたが、表にするとき省いた。天候により授業を入れ替えたり、空襲により授業を中止したりなど、柔軟に適用した形跡が見られた。

この方法であれば、ある教科目を短期集中して取り扱うことや、教科を越えて同じ素材を扱うために進度を調整するなどの工夫が出来る。この週単位ではない時間割を作成することは、年間計画で年の時数を確保することで生まれた発想である。週単位の時間割を作成すると、一つの教科目は年間の週の数ごとで削減することになってしまう。そうすると、カリキュラム作りには困難が生じる。そこで、各教科目および行事の内容を精査し、統合すべき点は統合し、整理して、最低限に必要な年間総時数を確保する。その総時数を配分して、月ごとの時間割を作成していく。

この年間計画表には次のような説明が示されている。

(一) 年実践計画表

- 1 「取扱上の要点」に示された修練目標、取扱上の工夫を読み、行事、農耕飼育及各教科目相互間に示された実線、点線をたどつて、これ等相互の連関と一体化とを知る。
- 2 一ヶ月、二ヶ月にとどまらず、一年を通じて如何に錬成せんとしてゐるかを線の主方向によつて読みとる。
- 3 行事及各教科目の下に示した数字は、取扱時間であつて、題目のみで数字の示されていないのは、他の行事、科目の中に於いて取扱はれてゐる。
- 4 農耕飼育暦を上欄に示したのは、農耕飼育の中に於いて行事、教科を一体的に錬成せしめる工夫の便宜の為である。
- 5 月末の時間はその月の取扱時間を示し、取扱上の要点欄三段の上段は授業可能時間、中段は授業時間、下段は差引いた時間で機動時間を示す。()の中は女子取扱時間。(34)

行事と教科目で連関するものは線を引いて関係を示した点に着目したい。一般的に表を作成する場合は、それぞれの教科目の配当を示すのであり、それぞれの教科目には関連を示すことはあまりない。教科目で連関する内容について線で結ぶことで全教科目の教育内容を把握でき、他教科目との授業との関連や内容を統合していくことが容易になる。総合的な授業を意識して実践できるように工夫したのである。この年間の計画表の例が図16-1である。二年生の四月と五月を示したが、実際は一年間分作成されている。

次に、月間の計画表であるが、年間の計画表を詳しく教材内容を配置し、時間割を掲載している。その月間の計画表については次のような説明がある。

(二) 月実践計画表

- 1 初三までは男女の差が著しくなく、殆んど同じ計画表で実践されてゐるので、学年一枚を示した。初四以上に於いて一組は男組、二組は女組である。高等科計画表は、新教科書の発行が遅れた関係上、その形式等初等科と異なるので、のせないことにした。
- 2 七月までしか示していないのは、実践記録なるが為である。
- 3 左欄の「経営上ノ配慮」に担任訓導の月の学級経営の理想が、端的に表現されてゐる。この理想の下に以下に経営されてゐるかの内容を^て検すべきである。
- 4 下方の時程欄を見て、上方の教科の項をみれば、時間と指導内容との関係が明瞭にわかる。
- 5 準備欄には、教科指導の準備、生産飼育の準備等を予め記入して置く。
- 6 家庭、教科外欄は、教科外に児童にせしめ置くべき家庭作業を記入する。
- 7 天候欄の記入は下掲の記号による。(引用者注：略)
- 8 時程欄には予め一ヶ月の予定を立てておくが、天候、行事の変更等のため時程が変更した場合は、時程の下に黒丸をつけて教科の変更を示してゐる。
- 9 反省記録欄は担任訓導の自由に記入がなされて居り、児童の氏名等を記入してあるが不要のない部分はここには省略した。
- 10 教科指導並に生産飼育に於いて年実践計画表と一致せぬ場合があるが、これは天候等の為の予定変更によつて生じたものである。
- 11 実践記録は月の反省であると共に、翌月経営上の配慮に示唆するところが多い。(35)

この月間計画表の説明では、「学級経営の理想」や「教科指導の準備」「反省記録」など、予定表としての機能だけではなく、実践記録として、次年度への反省として記録されていることがうかがえる。年間を通した教材の配置だけでなく、指導のための教材配置と指導計画表になっている。

月間の計画表には「経営上ノ配慮」があり、各担任がどこを重点的に学習させようとしたかを示している。また、実施後に反省を書き込んでいるので、計画表とありながらも実施記録として次年度の参考にしようとしている。年間の計画表と同じく、行事と各教科目の教材で関連する教材については縦横斜めに線で結びつけていて、全体の教育内容を把握でき、他教科目の授業と統合していくことが可能になっている。この年間の計画表の後に作成した各月の計画表が図16-2である。

図16-1 初二戦力教育実践計画表(四月、五月)⁽³⁶⁾

図16-2 初二 四月戦力教育実践計画表（部分） (37)

月間の計画表では、天候によって変更するとき、一覧を見て容易に入れ替えや変更ができるようにし、実際の運用でも使いやすく作られている。

これらの教育実践計画表の立案・検討については、全校で組織され、全教職員で検討され、実施中も進行状況を査察し、月ごとの計画の反省は、毎月行われている。計画表作成の過程は次のように説明している。

- 一、教育計画表の検討 学級担任から戦力教育本部に提出して検討し、その後全職員で検討する。
- 二、教育計画表の修正及変更 実際に行った上での無理や天候による修正などは全職員に連絡され
、お互いに情報を共有する。
- 三、実践査察 実際の進行状況を、主事、戦力本部長の査察、各部の査察などにより確認する。
- 四、計画の実践反省 毎月上旬に前月の実践反省会を開き、将来のための意見交換をする。
- 五、連絡会 主事の指導の下、戦力教育本部長や各部長などが集まり、全体にかかわる行事の立案などをしていく。
- 六、授業法研究会 各部に割り当てられた時間で授業法の研究会を開く。
- 七、旬信 各家庭に月ごとの教材配当表を配布し、家庭で子どもの生活指導に役立つようにしている。
- 八、勝ちぬく私の生活 実績収録として生徒の作品を掲載した冊子を刊行し、確認と翌年の実践に役立つようにしている。(38)

この過程には二つの特徴がある。一つ目が第三師範附属の特徴である学校の家庭の一体化であり、そのために家庭通信を作成し、時間割を示し教育内容を知らせるとともに、その時間割に関連して家庭に協力を求めている。その例は図16-3である。二つ目が生徒作品の冊子「勝ち抜く私の生活」を作成している点である。児童作品の作成は他校でも見られるが、作品集よりも授業記録と位置づけているところに、教師が確認すること以外に、児童が学習成果を読んで、確認するという学習活動も視野に入れている点である。教師の指導のための計画表が、家庭にもつながり、児童の学習のためにもなるという、総合的な教育を目指していたのである。

図16-3 家庭通信の例

第三師範附属では、「戦時非常措置」により、国防や勤労、農産性拡大のために教科科目の時間数が大幅に削減になり、その結果、行事や各教科科目に必要な年間時数を算出し、そして各学期、月ごとに行事から配当していった。全体の行事や教科科目の関係を確認し、削減できるところは合科的な方法で削減していった。それを年間の表を作成し、年間で各教科科目の内容を把握し、次に各月ごとの時間割を作成し、それで他教科科目との関連を示した。これら総合的な授業の把握をし、何度も修正し、家庭への連絡を密にして家庭の協力を得ることなど、総合的な教育を展開しようとしていた。奇しくもそれは、時間数削減という状況が生み出した結果であった。この計画表は計画だけでなく、実践に使用できる学級経営案になっていた。

教育実践計画表は、単なる時間配当表ではない。担任訓導が、学校の意図する重点施策を有機的立体的に実践駆使する経営案であり、計画表である。 (39)

計画表を作成することは、全教科科目の内容を把握することになり、全体的な学習内容を把握して実践することになる。この全体を見回す視点が第三師範附属では全教師に同じように全体を見渡す視野を持つことが出来た。それゆえ、全校で指導する体制が可能だったのである。

第3節 国民科国語の取り扱いにみる国語教育観

第1項 他教科目を優先した教材配列

生産性向上のために、各教科科目の時間が削減されたが、国民科国語も削減の対象となった(40)。その結果、第三師範附属の国民科国語の授業時数は表16-3の通り、教科書に掲載の標準的時数に比べて大幅に削減されている。

表16-3 国民科国語の時数比較

学年	一	二	三	四	五	六
教科書予定時数	280	315	320	280	245	245
第三師範附属	192	295	221	188	165	166
差	88	20	59	92	80	79
%	68.6	93.7	78.9	67.1	67.3	67.8

※綴り方を含む

時間数は全体で約25%も削減されている。国民学校では45分授業が40分授業になった上に、このように削減しているので国定第四期に比べてかなりの時間減となっている。時数削減は当然、教科の指導内容にも影響する。国民科国語では、「話し方、綴り方は学校の戦力化生活に即応した題材により機動的に時間の配当を図った。」⁽⁴¹⁾と「話し方」「綴り方」を削減の対象にしている。「話し方」「綴り方」は各行事で扱われることで、国民科国語の時間数を減じている。行事の内容が国民科国語に入るのではなく、国民科国語の指導事項が行事へ移行したのである。ただ、総合教授が他の教科目とは別で設けられるべきものとして位置づけられているのに対して、第三師範附属では「他教科の指導の仲に於いて、又教科外の指導に於いて行学一般的取扱い」をするのであって、他教科の中に国民科国語の内容を統合しようとしたのである。国民科国語の位置は他科目の中心的な科目として位置づけられているのではなく、他教科目の従属的な科目として取り扱われている。とくにことばを扱う国民科国語では、他教科目にも関わる内容が多く、その他教科目と重複している部分を削減してしまう原因になっていると考えられる。行事や他教科目に統合されてしまうことは、国民科国語を用具教科として認識していることになる。国民科国語の教材には理科や地理、歴史に関することもあり、他教科の内容を国民科国語に統合してしまうことが可能であるが、第三師範附属では国民科国語の内容が行事の中に扱われている。どの教科にも統合できるということは、国民科国語が扱うのは、生活での言語活動であり、物語など文学作品を読むこと以外に独自性はないという考えになっている。

次に、教材配置と他教科との関連について調査したところ、表16-4の通り教科書の配列とは違った順番で教材を扱っている例が見られた。初等科一年では教科書の70教材の内、52教材が他教科目や行事と関連させている。文部省の『教師用書』で他教科目や行事と関連させているのが40教材なので、第三師範附属がより多くの他教科目との関連をさせているのがわかる。その中でも、配列を変えているものが複数ある。その一つの「一8」の「アヒル」は、音楽、体練、図画と関連させていて、「理「庭ノ動物」ト連繋」とあり4月中旬に配当しているのに合わせている。「一7」「ヘイタイサン」は行事の端午会に合わせたため、教科書では4月配当のところ、5月の配当にしている。「一20」「ヒカウキ」は教科書だと7月の配当だが、音楽・工作が9月の最初に扱っているのでこの時期に変更してある。「二16」「兵タイゴツコ」は教科書だと12月配当だが、図画がこの時期に「兵タイサン」の教材を使う予定なので、3月に変更している。

表16-4 一年の教材配置の比較

月	教科書	教材名	『戦力教育』		『教師用書』	
			時数	他教科目関連	月	他教科目関連
4	一1	ラジオ体操		修・体・音・図、入学	4	修・理・音
	一2	校庭の遊戯		修・体・音・図、入学	4	修
		オウチノ人(話)	1		—	
	一3	アカイ アサヒ	1		4	

	通学ノコト (話)	1	修・体・音・図、入学	—		
—8	アヒル	1	修・体・音・図、入学	4	理	
	植樹ノ話 (話)	1	修・体・音・図、入学	—		
—10	ココマデ オイデ	1		5		
	エンソク (話)	1	図、全校遠足	—		
—6	ヒノマルノハタ	1	修・算・理・音・図・工、天長節	4	修・算・音・図	
	ハナシ方	2		—		
—11	カミフウセン	1		5		
5	—9	ハシレハシレ	1	修・体・音・工、端午の節句	5	算
	—17	エヲカキマシタ	1		5	修・算・図
	—7	ヘイタイサン	1	算・体	4	修
	—12	ウシ・ヒバリ	1		5	
		端午ノ節句 (話)	1		—	
	—16	ホンダイサムサン	1		5	修・算
	—20	オツカヒ	1		6	
	—13	ユフヤケ	1	音	5	音
	—15	オハヤウゴザイマス (話)	1		5	修・算
	—4	ハトコイ	1		4	
	—5	コマイヌサン	1		4	
		強歩検定 (話)	1	図、強歩検定会	—	
	—24	キヲツケ	1	体・図・工	6	修
6	—18	サヤウナラ・タダイマ	1		5	修・算
	—14	オツキサマ	3		5	
		エ本ノ話	1	修・体	—	
	—21	デンワアソビ・オキヤクアソビ	2	修・体	6	修
	—25	アメガヤミマシタ	1	修・体・図	6	理
		アメ (話方)	1	修		

	—26	イケニフネ	1	体	6	
	—22	コトバノオケイコ・シリトリ	3	修・体	6	修
	—23	カクレンボ	1	体	6	修・音
	—27	ホタル	1	音	6	音
7	—28	タナバタ	1	算・習・工作、七夕祭	7	算
	—30	ココハドコノホソミチダ	1		7	
	—31	オミヤノ石ダン	1		7	
	—32	アサガホ	2	修、夏休み	7	修
	—33	オハカノサウヂ	2		7	修
	—34	ハナツミ	2	修、夏休み	7	修
	—35	ユフダチ	2	修、夏休み	7	
	—36	ニジ	1	修、夏休み	7	
	—29	ハコニハ	2		7	
	—37	アリ	1		7	理
	—38	川アソビ	3	修・音・図・工、夏休み	9	修・図・算
9	—40	トビトカメ	2		9	
		ナツヤスミノオハナシ (話)	1	理・習	—	
		アラシノヒ (話)	1		—	
	—39	メダカサン	1		9	
	—41	シタキリスズメ	4		9	図
	—19	ヒカウキ	1	音・工、航空日	6	
		ハタケニクル虫	1		—	
	—42	オツキサマ	1		9	理
		コトバノオケイコ	2		—	
		慰霊祭 (話)	1		—	
10	—43	モモタラウ	5		9	修・音・図
	二1	山ノ上	2		10	音

		オツキミ (話)	1	理・音・工、仲秋名月	—	
	二3	ウサギトカメ	3	修	10	
		秋ノ祭 (話)	1	算・理、図	—	
	二4	ラジオノコトバ	2		10	
	二5	ニシハタヤケ	2	図	10	
	二6	カマキリヂイサン	1		11	理・図
		イナゴトリ (綴)	2	理・図	—	
11	二2	アシタハウンドウクワイ	2	修・体・習・図、体錬大会	10	修・図
	二7	サルトカニ	3		11	算
		コトバノオケイコ	1		—	
		体錬大会 (話綴)	2	図	—	
	二8	オチバ	1	理	11	理・図・数
	二9	イモヤキ	1		11	理
	二10	コモリウタ	2	音	11	音
	二11	オイシャサマ	2		12	算・音
		ドングリヒロヒ (話)	1	理	—	
12	二12	デンシヤゴツコ	3		12	音
	二13	ケンチャン	3		12	
		ヒビ・アカギレ・シモヤケ (綴)	1	理	—	
	二14	冬	3	理	12	理
	二15	オ正月	3	算・理・音・習・図	12	
		ススハラヒ (話)	1		—	
	二18	シヤシン	2		1	
		エ日記エ話 (話)			—	
1	二17	ネズミノヨメイリ	1		1	
		元日ノ朝 (話)	1	修・図	—	
		オ正月 (綴)	2	修	—	

		絵日記・整理 (綴)	1	修・数	—	
	二20	日本ノシルシ	2		2	音
	二19	カゲエ	1		1	
	二21	ハナサカヂヂイ	3		2	
		コトバノオケイコ	1		—	
		サムサラフツトバセ (綴話)	1	図	—	
2	二24	ウグヒス	2	音	3	修・算・理・音
		ヒラガナノ書方	3		—	
		豆マキ	1	修・図	—	
		コトバノオケイコ	3		—	
		紀元節・新年祭 (話綴)		修・理	—	
		ヒラガナノ書方	3		—	
		コトバノオケイコ	2		—	
	二22	ユメ	2		2	修
	二23	机トコシカケ	2	工	2	図
3	二25	ツクシ	1		3	算・理
	二16	兵タイゴツコ	2	図	1	
		芸能会 (話)	1	算	—	
		コトバノオケイコ	2	修	—	
	二26	汽車	3		3	

※「教科書」の項目は、「一」が「ヨミカタ 一」、「二」が「ヨミカタ 二」でその後の数字が教科書で出現した順番

もともと国民学校の教科書は他教科目と連関されることを予想して教材は担当をしているが、第三師範附属では独自の観点から配置し直している。多くが行事や他教科との連関で変更しているのもあって、行事は学校独自の日程で組まれるから、学校の独自性を尊重したために教材配置を変更したのである。

第2項 児童の自発的な「内なる活動」の重視

第三師範附属では各教科目で重点的に扱う項目を設定し、時間数削減に対応していた。国民科国語で

は「国語の重点修練」として、重点項目を説明しているが、わずか4ページであり、他科目に比べて極めて少ない⁽⁴²⁾。「国語の重点修練」によれば、全教科を精神教科と能力教科に大別し、国民科は児童の内面までに影響させる科目であるから精神教科であると説明している。

国民科の指導は児童の自己を国民的生活関連の中に定位せしむる、いはば時間的、空間的坐軸の形成に役立ち、又児童の内なる活動に対し、支配力、決定力を有する社会的枠組の形成に役立つのである。(43)

この「内なる活動」が具象化されたのが言葉であり、その言葉を使うことで、精神を鍛えるという論理が働いている。「内なる活動」をするには、生活と関連させていくのである。具体的には、綴り方で生活行動と関連させて、皇国民的精神を宿すために、話し言葉や綴り方を使っている⁽⁴⁴⁾。読み方でも生活の中に教科指導を実践するという考えで、ことばの躰を重点にすることを示し⁽⁴⁵⁾、「生活の中に実践の中に教科内容の指導を展開し、行の中に国民科教育を樹立しようと専念してゐる⁽⁴⁶⁾」とあり、生活と実践と関係を強く持ち、「行」すなわち言語活動を重視した指導を強く打ちだしている。これは「内なる活動」のための指導と定義している。この「内なる活動」は国語教育において皇国民錬成と合致していく。

地理、国史などを自ら分岐させ、漸く古典古語等をふくめて国語らしきを加へた後も、この科目によつて皇国精神を身内に湧かせ、民族文化の伸張に貢献する人材の育成を図る企画の下に教科書の文章教材は採られてゐる。これを読み充分行き届いた解釈をすることは、正しく美しい我が国語を理会するに必要なことであり、朝礼、儀式、授業等の間に聴く訓話の聴き方（音声言語の理会）と共に極めて重要な国語力啓培の方法である。(47)

教材内容を「内なる活動」から、「皇国精神を身内に湧かせ」ること、そして文章の読みを十分にすることで、「正しい美しい我が国語」を理解し、聞くことで国語の醇化をさせようとしていた⁽⁴⁸⁾。そのために、「綴り方」や「話し方」は単独で取り扱うのではなく、「綴り方」のために素材について話し合ったり、作文を読み合うなど、それぞれを関連させて学習させようとし⁽⁴⁹⁾、時数削減に対処し、児童の自発的な活動から自発的に学ばせようとしていたのである⁽⁵⁰⁾。

他教科目との関連については「すべての教科が国語によつて担はれてゐることを思つて国語研究部では積極的に他教科との深き連関について指示し注文することを怠らない。⁽⁵¹⁾」と述べているが、その実は、「担はれてゐる」のではなく、国語は他教科に集約され統合されている。ここでは国民科国語の理念と実際の扱いが異なっている。

第三師範附属では、国民科国語の重点項目を、話し言葉と書き言葉の指導に置き、精神訓練のために国民科国語はあると述べている。そして「生活の中に実践の中に教科内容の指導を展開し、行の中に国民科教育を樹立しようと専念してゐる」と生活と実践と関係を強く持ち、皇国精神を体得するための科目であると定義している。国民科国語では発表の仕方に図表貼付など、音声言語活動と綴方を関連させ

ることを重点項目にしている。皇国の精神を理解すると言っても、国民科国語の内容は他教科目と統合されているので、実際には、言葉遣いや文字指導になってしまう。その点からみれば、国民科国語では内容理解は他教科に移行し、言語活動が国民科国語独自性であるがごとの解釈をしていると思われる。ところが、それらの言葉遣いや文字指導により「内なる活動」が生じて、教材の内面に自発的に入り込み要素にも成りうるのである。国民科国語が用具教科として扱われることは、軍国主義の内容から離れるのではなく、言語や文字を扱うことで、教材本文を内面から自発的に皇国の精神を理解していくこと成りうるのである。

第4節 戦後教育との関係

第1項 児童の生活体験から出発した高度な計画性への評価

同校の学校史である『三十年のあゆみ』⁽⁵²⁾によれば、国民学校期を回顧して近藤修博は、国民学校期の『戦力教育』について、カリキュラムの方針については現在でも通じると次のように述べている。

その本の内容はいまの教育の中において、非常に必要な、また役立つことが書いてあるんで、つまりいろいろ教育の指導や、生活の指導の中でむだがあるというので、そのむだをもっと統合することが必要じゃないか。たとえば、国語の一つの科目として、虫のようなことが載っているとするならば、今度それは理科との関連において指導する。それがまた音楽の虫の声があるということならば、それに関連さすというような、そういう教科の中の統合というようなことが必要じゃないかという考え方があったんです。それは今の教育でも非常に必要なことですね。いまでもあの本を持っていて、いろんな学校なんかに話に行くときは、その内容はともかくとして、考え方というものをいまでも私は話をしているわけです（53）

また国民学校期に在職していた中島彦吉⁽⁵⁴⁾は、国民学校期の教育を「児童の生活体験から出発」していることなどを比較し、現在の指導過程と共通する点を挙げている。

児童の生活体験から出発し、問題提起、予見計画、実現へ。そして確認、拡充、発展という段階を考えて実践したわけです。今の指導過程と似ていますね。

（引用者注：略）

簡潔に申し上げて戦力教育というのは、きわめて高度な計画性のある教育と定義できるでしょう。（55）

中島彦吉は当時の『戦力教育』について、「きわめて高度な計画性のある教育と定義できるでしょう。」と評価している。国民学校期の教育を軍国主義教育として否定するのではなく、むしろ戦後にも通じる教育である点を評価しているのである。

戦後の第三師範附属では生活に根ざしたコア・カリキュラムを『小学校カリキュラムの構成⁽⁵⁶⁾』、

『生活カリキュラム構成の方法⁽⁵⁷⁾』などで発表し、戦後ではいち早く『討議法⁽⁵⁸⁾』、『新しい学校⁽⁵⁹⁾』などを発表している。それも国民学校期のカリキュラム改編の意識が影響されているという指摘がある。

これらは、第三師範附属の訓導・教師による回想であるので、国民学校期の軍事的な、皇国化錬成の教育についてよりも、そこに見られる現在にまで通じる意識を読み取ったものであり、決して国民学校への賛美ではない。むしろ、全校一致で研究した教育計画についての姿勢の評価である。その点を考慮しても、高い評価がなされている。その基準は計画性や児童の視点に立ったことである。

第2項 戦後教育計画との関係

次に、1949(昭和24)年6月に刊行された『小学校カリキュラムの構成』(以下『小学校カリキュラム』)⁽⁶⁰⁾から国民学校期と共通する意識について検討する。

戦後の第三師範附属では、社会科を中心とした生活経験を重視したコア・カリキュラムを展開している。その目的として、次のように当時主事であった小沢栄一⁽⁶¹⁾は述べている。

児童の生活に選ばれた豊かな経験を与えるためには、社会科と他教科が分離しているということに矛盾を感じなくなった。その結果教科融合の問題が真剣に考えられ、社会科の実践において把握した方向を基として新しい教育計画が進められたのである。教育の内容が児童の生活経験の総合構成にあると考える立場をとるわれわれは、ここに生活カリキュラムを学校教育の全内容とするにいたり、日夜これが構成と実践に努力を続けてきたのである。(62)

小沢栄一の主旨は他教科との総合、生活経験の重視であり、国民学校での総合と生活と類似した概念がここにある。もちろん、同書では戦時教育に対しては次のように批判している。

児童の自主的・自律的な自己活動よりも「国家」(それが何を意味したかは問わないとして)の要請に献身する随順奉仕の活動が学習の根本態度であり、学習の基盤は児童の興味にあるべきではなく、「国家」の要請にこたえなければならぬとされ、個別学習よりも集団学習が行われた。(63)(p. 8)

この反省の上から、児童の生活や実態を調査して、児童の興味ある活動を重視したカリキュラムを構成しようとしたのである。

『小学校カリキュラムの構成』では年次計画表を掲載している。年次計画表は、次の順で作成されている。

教育目標の設定

教育課題の選択

単元の設定

年次計画

学習単元の計画

週計画と日課表

この中の年次計画を図16-4に掲げる。この、年次計画に着目すると、「内容」「資料環境」「生活」「言語」「数量形」「表現」で項目が立てられている。『戦力教育』では教科ごとの教材で配置しているが、『小学校カリキュラム』では学習活動を中心に組み立てている。その差は大きいですが、上に内容がかかげ、その下に行事や教材を掲げるところは、『戦力教育』に似ている。関係性を全く排除することもできないであろう。

図16-4 年次計画 1949(昭和24)年

次に『小学校カリキュラム』のカリキュラム製作の過程は、年次計画、週計画、日課表となっていて、『戦力教育』の場合と類似している。『小学校カリキュラム』では、週計画案の作成過程を次のように説明している。

本校においては教務主任の全体的配慮に基づく指導のもとに、各学年担当者及び関係教官との合議によつて立案される。特に専科教師は周辺学習の基礎的修練についての指導と中核学習に取扱われるそれらの面について、担任教師への貴重な助言をなす。時には協力指導等についての配慮のなされる。この為の会議を木曜日に全員集合のもとにし、金曜にその計画を児童と共に協議する。(64)

『戦力教育』との過程を比べると、その大きな差は、児童がこの計画に参画していることである。そして、周辺と中核の学習に分けていることである。『小学校カリキュラム』では、「読み書き計算」などは周辺学習として定義されている。周辺学習と中核学習は教科ごとに分けているのではなく、活動や内容によって区別しているのであって、国語科は周辺か中核かという答えは出せないが、読み書きに関しては周辺学習であると定義されている。

また、中核学習が「頭脳(head)」に関することであるのに対して、周辺学習は「心(heart)」に関してであると定義している。それによれば、文学的な学習は周辺学習に入るとしている。これと、『戦力教育』での国語の取り扱いは類似している。

その他も、家庭学習や家庭への通信など類似点はいくつかあるが、しかし、児童中心であること、学習活動や言語活動などの能力表が提示されている点など、多くは異なっている。

もう一つ、記しておきたいのは、『戦力教育』での年間の総時間の計算である。国民学校期では文部省は週単位の時間数を提示していた。戦後になると、文部省は年間の総時間で提示している。1947(昭和22)年4月の「学習指導要領」では、国語の時間配当は表16-5のようになっている。

表16-5 国民学校期と戦後での国語の時数比較

学年	国民学校期		戦後
	文部省	第三師範附属	文部省
1年	280	192	175(5)
2年	315	295	210(6)
3年	320	221	210(6)
4年	280	188	245(7)
5年	245	165	210-245(6-7)

6年	245	166	210-280(6-8)
----	-----	-----	--------------

※()は週あたりの時間数

※国民学校期の文部省は週時間を年時数に換算

第三師範附属では、時数削減といいつつも、学年によっては戦後の時数よりも多くなっている。第三師範附属が2、3年で時数削減を抑えたのは、漢字修得・語句習得のためであり、基礎的な学習が国民科国語にまかされていたことが読み取れる。戦後においては、社会科の時数増により、低学年での時数削減が大きい。この点は文字修得・語句習得の観点から見ると、大きな差ではあるが、年間時数で表現するなど、年間を通して学習を見る、全体を見渡す考えは、第三師範附属も戦後教育も共通している。

『戦力教育』も『小学校カリキュラム』でも知識の詰め込み主義に対して批判している点は共通している。知識のみではなく、行動できる人物を育成しようとしていた。そのためには、学校が日常生活から乖離することなく、日常の生活と学校とが密着する必要があった。『戦力教育』では生活も皇国化であり、教育目標と一体化していたので、生活を教育に導入すること、行学一体ということが持ち出されてきた。『小学校カリキュラム』では、生活も民主化を目指していたため、教育内容と合致し、生活を学校に導入する生活カリキュラムが持ち出されてきた。そして、年間の計画表を作成し、そして週ごとの計画表を教職員全員で検討していくこととし、修正するなど、工夫を凝らしていた。

一方で、国語教育についての取り扱いは、時数削減や周辺教科など、用具としての取り扱いに共通点が見られた。それらの姿勢が、回想録において、共通するという意識を生じさせたのであると思われる。

